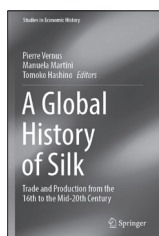


# 書評と紹介

Pierre Vernus, *Manuela Martini and Tomoko Hashino, eds.*

## *A Global History of Silk*

*: Trade and Production from the 16th to the Mid-20th Century*



評者：阿部 武司

### 本書の課題とそれを理解するための前提

『絹のグローバル・ヒストリー——16世紀から20世紀半ばまでの貿易と生産』と題する本書は、ヨーロッパを中心とする諸外国と日本の経済史研究者が、コロナ禍による国際交流の制約をオンライン会議等で乗り越えながら、貿易、生産、労働、制度、技術など多様な視角より、養蚕・製糸・絹織物製造から成る絹業の世界史的展開を16世紀から20世紀半ばまでという長期間を対象にして論じた共同研究の成果である。まず本書の目次を掲げておこう。

Pierre Vernus, Manuela Martini, and Tomoko Hashino [橋野知子], 'Introduction: Silks, a Global Perspective'

#### I : Exchanges, Markets and Trade

1. Ricardo Franch Benavent and Daniel Muñoz Navarro, 'The Golden Age of Valencian Silk? Rise, Crisis and Productive Reconversion of the Valencian Silk Industry (Eighteenth-Nineteenth Centuries)'

2. Anne Wegener Sleswijk, 'Auctions and the Distribution of Silks in the Eighteenth-Century United Provinces'
3. Chuan-hui Mau, 'The Impact of Sino-European Trade on Chinese Silk Production from the Mid-seventeenth to the Early Twentieth Century'
4. Pierre-Emmanuel Bachelet, 'From Southeast Asia to Japan. Trade, Circulation, and Uses of Silk in Seventeenth Century East Asia'

#### II : Labour Organization, Economic Hierarchies, and Gender

5. Mario Grassi, 'A Delicate Equilibrium: State Projects, Guild Dynamics, and Personal Interests in Silk Weaving in Ancient Regime (Turin, Eighteenth Century)'
6. Kazue Enoki [榎一江], 'The Japanese Silk Reeling Industry and Women's Labor: The Case of the Tomioka Silk Mill'
7. Manuela Martini and Anne Montenach, 'Around the Weft and the Warp: The Transformations of Auxiliary Trades in Lyon Silk Manufacturing in the Eighteenth and Nineteenth Centuries'

#### III : Institutions, Technology, and Transfer of Knowledge

8. Masaki Nakabayashi [中林真幸], 'Organizations for Quality Control: Branding in the Japanese Silk Reeling Industry'
9. Pierre Vernus, 'Facing Rising Uncertainty in the Lyon Silk Market from the Mid-nineteenth Century to 1914'
10. Daisy Bonnard and Liliane Hilaire-Pérez, 'Rewarded Inventions and Repositories in Nineteenth Century Lyon Silk Industry: A Pattern of Collective Management of the "Public Domain"'
11. Tomoko Hashino and Yukuo Murata [村田優久夫], 'From Lyon to Kyoto: Technology Transfer, Inflow of Knowledge, and Modernization of a Traditional Silk-Weaving District in Japan, 1887-1929'

編者3人による序章「序章——世界的視点から見た絹業」は、近年世界的に注目されているグローバル・ヒストリーの一環としてヨーロッパとアジアを統合する視角から、世界的商品である生糸・絹織物の生産と流通を考察した全11章の要点を紹介しているが、ここでは本書を理解するための前提として序章に示された、2つの基本的史実を確認するにとどめる。1つは、世界絹業の地理的分布である。養蚕地帯は17世紀末から2世紀間安定的に東アジアと地中海沿岸に存続した。製糸業は、ヨーロッパでは19世紀初頭から数十年間、スペインのカタロニアから南フランスを経たイタリアのポー渓谷まで展開して絹織物の中心地リヨンに絹糸を供給していたが、リヨンは中近東（レヴァント）からも絹糸を得ていた。1860年代からは中国と日本から輸入された生糸がリヨンを支えるようになるが、その背景には微粒子病の蔓延があった。

もう1つは、19世紀後半から急速な発展を遂げる東アジアとくに日本の製糸業の意義である。東アジア産生糸は当初はリヨンに、のちにアメリカにも販売されたが、品質面では高級と言ひ難く、それを使って織物が量産されるようになると、古代以来、貴族や聖職者など上層階級向け奢侈品であった絹織物は、新興のブルジョアジーや中間層の衣料用へ大衆化していった。

以下では各章の内容を一段落に要約したあと、評者のコメントを、続く段落に加えていく。

## 第1部 交換、市場、貿易

第1章「ヴァレンシア絹の黄金時代か？——勃興、危機、ヴァレンシア絹業の生産の再転換（18～19世紀）」は、18～19世紀スペインのヴァレンシア地方における絹業の興隆と衰退を考察している。18世紀には絹糸輸出の伸びが

養蚕の近代化も促進したが、ヴァレンシア王国の絹織物業の保護政策の一環として絹糸の禁輸措置が繰り返し実施された。製糸の新技术の導入も制限され、絹糸の品質は中位に留まった。同世紀後半には先端技術を取り入れた製糸工場が登場したものの、戦争や高コストにより失敗した。スペイン王位継承戦争後のブルボン朝の重商主義政策のもと、織物の輸入禁止や輸出奨励により絹業は一時的に活性化したが、高級織物の優遇は下級織工の反発を招き、生産は減少した。その中で一部の裕福な織工が会社企業を設立する一方、多くの織工は原料不足と販売不振から苦境に陥り、共同事業を試みたものの資金不足により挫折した。さらにフランス製品が市場を席卷する中、王国が伝統的な厚地織物製造を保護したため織物の競争力は失われた。19世紀に入りギルドが解体され絹糸輸出も再開されて、養蚕業の利益も増えたが繭の品質は悪かった。同世紀半ばに絹糸生産は機械化され大工場も登場した。だが微粒子病や、ファッション性の欠如に由来する織物の国際競争力のなごのため、ヴァレンシア絹業は停滞し続けた。

本章では、奢侈品である絹織物の製造を優遇する重商主義政策が、養蚕業や製糸業の発展を抑制し、また、織物のファッションへの無関心を招いたという指摘が重要と思われる。

第2章「18世紀オランダ連邦共和国における絹の競売と流通」では、18世紀のオランダにおける絹製品の競売と流通が論じられる。17世紀半ば以降、絹関連の製糸・織物・染色は、外国製品に押され衰退した。代わって東インド会社（VOC）がベンガル産生糸の輸入を18世紀半ばまで担い、春秋2回の自由競売を盛んに行い、秋の競売の目玉商品が絹糸布だった。VOCの販売先には大規模な卸売商のほか公認されたブローカーがホテルなどで小規模な第二段階目の競売を開き、卸売から小売までの情報

を一手に掌握し取引コストを削減していた。1730年時点で絹専業ブローカーは8人で、酒類22人に比べ少数だったが、新聞広告やポスターにより顧客を集め、市当局から無料事務所を得て影響力を強めた。ブローカーの顧客にはしっかりした販売網を持たない外国商人、他のブローカー、製糸業者、書籍商など多彩な層が含まれ、市場の秩序を逸脱した私利私欲の追求や製織への投資も横行した。また、安価な、あるいは傷物の絹製品を女性小売店主やユダヤ人商人が、ブローカーから購入することによって生計を立てる例も多く見られた。

本章では、鎖国下の日本とも関わりが深かったVOCの輸入絹製品の競売を解明し、それをさらに競売にかけていたブローカーの活動を考察した点が貴重な貢献である。第9章に登場するリヨンのブローカーとの対比も有益だろう。

第3章「17世紀半ばから20世紀初期までの中国産絹に関わる中国・ヨーロッパ間貿易の影響」では、清朝政府の対西欧貿易政策が中国絹業に与えた影響が主に論じられる。明朝末期以来の海禁政策が1684年に解除された後も貿易制限は続き、1757年に貿易港は広東に限定されたが、1833年におけるイギリス東インド会社の独占禁止後、同国商人の活動が顕著となり、1842年には南京条約で上海などが開港されて対西欧貿易が躍進し、中国絹業もヨーロッパ向け絹糸輸出を激増させた。ヨーロッパ商人は上海や天津に蒸気機関を導入した大規模製糸工場を開設したが、繭不足そのほかの経済的困難により多くは失敗に終わった。19世紀後半に微粒子病が中国絹業に深刻な影響を及ぼしたが、それに対し中国は効果的な対応を取ろうとせず、微粒子病を免れた日本の産卵紙や生糸が欧州市場で歓迎されることになった。その後も中国産絹糸はヨーロッパで優位を保ったものの、伝統的な製糸業は衰退していった。中国の

14世紀以来の海禁政策が西欧科学技術の導入を拒み、それが競争力低下を招いた事実は否定できない。

本章では、明朝末期以来の海禁政策が西欧の科学技術の拒絶を招いた大きな要因であったとする主張が興味深い。そうであるとすれば、鎖国時代の日本がオランダ、そして他ならぬ中国を通して西欧文明を摂取できたのはなぜなのだろうか。また、微粒子病の存在自体に中国が無関心だったのに対し、日本では対策が意識的に講じられたという指摘は今後さらに検討されるべき重要な論点だろう。

第4章「南東アジアから日本へ——17世紀東アジアにおける絹の貿易、流通、および用途」では、日中の国交断絶期の17世紀ごろ、日本が中国産絹糸を東南アジア経由で調達していた事実が論じられる。絹織物産地の京都西陣の主要原料は中国製絹糸だったが、中国の海禁政策期には日本人やポルトガルの商人たちが東南アジア各地で中国人から絹糸を入手していた。豊臣秀吉の統治以降、長崎が最大の輸入港となり、朱印状や糸割符制度が設けられ、オランダ経由で絹糸輸入の確保が図られた。鎖国の完成後、日本は中国とオランダの船との取引に限定はしていたものの、南東アジアからはいぜん絹糸を輸入していた。中国産絹製品は日本の伝統工芸や衣装文化に多大な影響を与えた。東南アジアを経由する交易ルートは、日本と海外諸国との文化交流を深める契機となった。絹製品は外交の場でも重要な役割を果たし、贈答品として絹は日本の国際的な地位を高める手段となった。

本章では、鎖国以前に日本人が北ベトナムなど南東アジアに積極的に進出し、現地で中国人と対等に交易して中国産絹糸を獲得していた事実が活写されており、前章と同じくグローバル・ヒストリーの醍醐味が感じられた。ただ

し、日本人の海外進出が徳川幕府によって禁じられたのちの東南アジアとの貿易関係の変化が明示されていない点は惜まれる。

## 第II部 労働組織、経済的階層組織、ジェンダー

第5章「デリケートな均衡——アンシャン・レジム期の絹織物における国家事業、ギルドのダイナミクス、個人の利害（18世紀のトリノ）」では、18世紀のイタリアのトリノを舞台に、サヴォイ家支配下のピエモンテ絹織物業の展開が、国家、ギルド、個人という3つの主体に注目して社会学の観点から考察される。まず国家の施策では、1676年に設立された商業管理機関 *Consolato di Commercio* が絹業の発展に大きな影響を与えた。製糸から織布までを包括していた旧法を1687年勅令によって統合して欧州絹織物市場の制覇を目指す試みもなされた。国家の推奨の下で、1710年に織機100台を備えた特権企業が誕生したものの資金難で消失した。国家は、ギルド制下の職工を保護し、商人には資金的援助を施した。次にギルド制は、トリノではイタリアの諸都市に比べてそれが強固に続いたものの、内実は一枚岩ではなく、商人と織工の利害が異なることが多かった。最後に個人の利害に関しては、親方織工の家族のほか徒弟・労働者も同居する小規模作業場の内外で、整経や管巻といった準備工程を担当する未婚女性や未亡人が貧困に苦しんでいた事実を忘れてはならない。

本章では、第1章のスペインの場合と同じく、重商主義政策による絹織物業の育成がイタリアのトリノでも図られていたこと、また第7章のリヨンの事例と同様に、織物の準備工程を貧しい女性たちが担っていたことが興味深かった。

第6章「日本の製糸業と女性労働——富岡製糸場の事例」では、1872年にフランス式近代

製糸技術を導入して官営模範工場として始まった富岡製糸場が、所有者をたびたび替えてついで1987年に閉鎖するまでの過程が、女性労働に焦点を当てて詳述される。同製糸場では開業当初、短時間勤務と月給制の下で旧武士階層の娘たちが、見習工女としてフランス人から技術を習得していたが、1888年以降、工女の急増に対応して日給制や歩合制賃金が導入された。93年に所有者は三井家となったが、98年には新たに導入された等級賃金制度をめぐって通勤工がストライキを起こすなど労使関係も変容していった。1902年の原合名会社、1939年の片倉製糸紡績株式会社（のち片倉工業株式会社）という所有者の交代は、人員管理や設備投資方針を変化させたが、原合名時代の1924年には御法川式多条繰糸器が導入され、中下級生糸を短時間に量産するという旧来の熟練の概念が、高品質の生糸を丁寧に作るという内容に一新された。富岡製糸場では、戦時期には女子挺身隊やパラシュート用絹糸生産で女性に重労働が課され、敗戦後にはGHQの施策の下で外貨獲得産業として復興が奨励された。その後、自動繰糸器による合理化が進められ、群馬ブロック中央工場としての機能が維持された。富岡製糸場の歴史は、日本近代資本主義を支えた女性労働の貢献を象徴している。

本章の結論部分で、戦間期に大手繊維メーカーが女性労働者を企業につなぎとめるために、寄宿舎に投資してそこを拠点に教育を施す制度が定着したものの、元々メーカーではなかった原合名会社はそれを意識できず、その重要性を認識していた片倉製糸紡績が富岡工場を手に入れるや直ちに関連投資を行ったと論じられているが、まことに興味深い指摘である。日本の大手繊維メーカーが、若年女性労働者が急速に不足していった高度成長期以降、女性たちを引き付けて意外に長い生命を保てたのも戦間

期に樹立した労務管理制度のおかげだったのかもしれない。

第7章「経糸と緯糸の周りで——18～19世紀のリヨン絹織物業における補助的業務の変容」では、18～19世紀のリヨン絹織物業で、女性が担当していた補助的労働の変容が活写されている。地域分散的な多数の家内工業から成る織布工程では、経糸を引き上げるために重いロープを引く drawgirl や管巻工、整経工、模様デザインの織機に掛ける糸に写す pattern-reader など、全労働者の25～30%を占める補助的労働者が手織工を支えていた。フランス革命後のジャカードの導入によって drawgirl や糸を引き上げる thread-lifter が不要となり、代わってジャカードに組み込むカードを作る card-maker や経糸をつなぐ warp-linker といった新職種が出現した。その間に技能レベルおよび出来高給の格差が拡大し、商人－親方－補助労働者の3層から成る下請網が複雑化した。不払賃金や解雇、原料詐取をめぐる紛争は市参事会や労働裁判所で調停され、19世紀半ばまでに労働法制や監督制度も整備された。技術革新と制度改革は補助労働者の保護を強化し、リヨン絹織物業の高度な分業体制を支えた。

本章は、過酷な条件の下で働く女性たちによって製織の準備工程が担われていたことを詳細に考察している。織物業では織布の前提である経糸と緯糸を整える準備工程が不可欠であり、そこでの労働条件が劣悪になりがちなのだが、この点は研究者の多くが意外にも意識していない<sup>(1)</sup>。同様な事実がイタリアでも認められることは第5章にも示されている。

### 第III部 制度、技術、および知識の移転

#### 第8章「品質管理の諸組織——日本製糸業に

おけるブランディング」では、日本製糸業が外国商社の商標支配から脱し、製糸家自身が品質管理とブランディングを主導したことで急成長を遂げた過程が解明される。1859年の横浜開港から始まった生糸輸出は、82年のフランス恐慌を契機にアメリカ市場へと急速にシフトし、器械製糸の普及に支えられて取引数量も飛躍的に拡大した。長野県諏訪地方の有力製糸業者が1879年に結成した開明社は、共同の揚返しや製品検査を導入し、製品の等級分類と商標権を確立した。これらの革新により生糸の品質保証が実現し、アメリカ生糸市場での日本のシェアは1880年代末の50%から1920年代には80%へと上昇した。その間、1890年代半ばには中国上海の器械製糸業との競争で品質プレミアムが失われ、諏訪内部でも大手と小規模業者の間で品質を巡る対立が表面化した。開明社から大手製糸家が離脱して自前の商標を樹立し、諏訪は再び成長軌道に乗った。一方、短期的利益を追求する中国製糸業は長期戦略が立てられず精彩を欠いていった。諏訪製糸業は等級賃金制による品質低下問題に対処し、1910年代には従来から重要だった労働生産性に生産量・糸の細さ・光沢を加味した新賃金制度を確立した。イタリアでは商工会議所がブランディングを担ったため、製糸家は中小規模にとどまったが、日本ではその機能を内部化した一部の製糸家が大規模化した。

本章の最後に指摘された日本とイタリアの製糸家の規模の相違は魅力的な解釈であるが、評者が解明した戦間期の日本産地綿織物業とも類似性がある。個別機業者が激しく競争しつつ単純な生地・晒綿布を量産していた大阪府泉南などにおいて、大規模で、しかも規模を拡大していった機業者が少なからず存在したのに対し、

(1) 中岡哲郎『日本近代技術の形成——〈伝統〉と〈近代〉のダイナミクス』（朝日選書、2006年）第4章はその例外であり、織物の準備工程がいかに労働集約的であるかを詳述している。

兵庫県播州などでは県立工業試験場や工業組合に支えられた中小規模の機業家が規模拡大を伴わず、一丸となって産地の発展を推進していった。製糸業とは違って泉南などではブランディングは問題ではなく、紡績企業との綿糸購入を通じた特殊な関係などが規模の拡大につながったとみられるが、播州ではイタリアと同様に公的機関がブランディングも含めて重要な役割を果たした反面、機業家は大規模化しなかった<sup>(2)</sup>。

第9章「19世紀半ばから1914年までにリヨン絹糸市場が直面していた不確実性の高まり」では、リヨン絹糸市場が19世紀後半に、微粒子病による欧州産繭の壊滅のためアジア産絹糸への依存を深めた結果、絹糸の品質の低下と投機的価格変動の拡大という不安定化が増した事実が、まず明らかにされ、それへの対策として商業会議所や業者組織が以下の施策を展開し1890年代には成果があがったことが論じられる。①1843年の不正防止団体や63年のクレディ・リヨネの設立、60年代後半以降の絹織物業組合、絹糸商連合(UMS)、製糸家連合の結成、②週刊・日刊の市場情報紙や関連業者の名鑑、1872年以降の統計の刊行、③UMSによる絹業内の紛争仲裁、および1895・1912年のアジア産絹糸に関する慣行規則の制定、④1805年創設の絹糸の湿気除去施設の設置と、そこへの検査員の配属、煮沸室の付設など、⑤1898年以降の欧州諸国との技術交流を通じた品質管理技術の向上。

本章からは、中国に関する第3章でも詳述されていた蚕の微粒子病、およびそれと深く関わるヨーロッパおよびレヴァント産から中国・日本産への原料絹糸の転換が、リヨンにとって大問題であった事実を知ることができる。さら

に、日本が明治期以降、官民一体となって進めていった勸業政策が、フランスでは上記2つの変化を契機によりやうに進んだ事実も興味深い。

第10章「19世紀リヨン絹業で顕彰された発明とその保存施設——「公共領域」の収集管理の一つのタイプ」は、19世紀にリヨン商業会議所が、「公共部門」として絹業に関する発明を集中管理し、それらを評価・保存・公開する仕組みを構築した過程を描く。18世紀以来、ギルド制度に由来する授賞制度で技術開発を奨励してきた伝統のもとに、1806年設置の労働裁判所が特許訴訟や、工場デザインの私有権の保証を担当し、特許期限終了後には26年設立の工芸学校(のちラ・マルティニエール校)に図面や機械が移管された。商業会議所は、附属の絹糸湿気除去施設の収益に基づく独自の報奨金制度を運営し、前出の工芸学校や35年設立の発明収蔵室を教育・公開の場として整備した。商業会議所は、発明家に報奨金を支給する代わりに、知的財産権の保護は重視せず、「公共領域」への技術の開放を柔軟に奨励した。44年以降、絹業関連の特許が増えたものの、ジャカードのような偉業を果たした発明家を顕彰する文化は育たなかった。20世紀初めには博物館や新聞・雑誌が技術展示の主役となり、本章で紹介された施設は役割を終えた。

本章で論じられている、地方の公的機関が、地域内の発明を地元産業にのみ公開させる文化的風土は、リヨンだけでなく戦前の日本にも存在したように思われる。日本の地方にみられた様々な産地では府県立工業試験場のような公共機関が地域の産業発展を主導することが多かったが、その際、公務員である試験場長が、新しい技術や製品デザインを他産地には秘密にして、産地内の業者のみに教えるといったこと

(2) 阿部武司『日本における産地綿織物業の展開』(東京大学出版会、1989年)第2部、第3部。

がしばしば見られた<sup>(3)</sup>。

第11章「リヨンから京都へ——1887～1929年の日本における伝統的絹織物産地の技術移転、知識の流入、近代化」では、1872年にリヨンから技術を移転した京都西陣の絹織物産地が1887～1929年にそれによって近代化していった過程が経時的に考察される。明治初年に政府から派遣された西陣の織工は高価な力織機の購入を断念し、バタタンとジャカードを選択的に日本に持ち帰ったが、前者がほどなく全国に普及したのに対して、ジャカードが西陣のようにやく定着したのは第1期（1887～1905年）であった。省力化、および複雑な柄の織物の生産に効果を発揮したジャカードは、手織機に依存し続けた西陣に広まり、織布業に従事する女性を増やした。第2期（1905～1918年）には、織元商人の支援で家内工業が急増し、工程間分業が進展した。問屋が貸与する、ジャカードを備えた手織機による織物生産が躍進し、小規模経営が激増したが、やや規模の大きな工場では力織機の試験的導入が進んだ。第3期（1918～1929年）には、手織機依存の小規模経営が他の絹織物産地に比べ多かったものの、電力普及と西陣近隣の在来的織機メーカーの発展により、家内工業が自ら購入した力織機が普及していった。西陣の近代化は、開発経済学でいう適性技術の成功事例である。

本章は論旨明快であり、手織機よりも力織機を近代的生産手段として高く評価している。ただ、製品のデザインが複雑な工芸品の絹織物製造を古代から守ってきた西陣にとって、力織機で作られる絹織物は製造は容易だが、付加価値が低い製品であった。そうした下級織物が増えることを単純に近代化とみてよいのだろうか。

西陣で力織機の普及が他の絹織物産地に比べて緩慢であった理由も今述べたことに関わるように思われる。

#### 本書全体に関するコメント

以上の紹介からもうかがわれるように、本書は、大航海時代以降20世紀前半までの絹業の世界的展開を、諸地域の一次史料に基づいて多彩な視角から考察した、おそらく類書がないすぐれた研究である。最後に、本書全体に関わるいくつかの論点を示しておきたい。

綿業の場合、インドで展開した紡績と織布の製造が、中国から日本等へとアジア各地に技術移転し、小農の農閑余業の在来産業として広まっていった一方、ヨーロッパではまずインド産手織綿布が輸入され、その需要が激増したのちイギリス産業革命によって綿糸・綿布の機械制生産が始まり、さらにその新技術が19世紀半ばにインド・中国・日本へ移転されるという技術移転の経路が見出される<sup>(4)</sup>。絹業の場合にも近代以前を射程に入れて、そうした世界史的展開の軌跡が辿れないだろうか。古代にはシルク・ロード、すなわち中国産の絹織物が西アジア経由でローマ帝国に搬出されていたが、その後の時期については、18～19世紀にフランスのリヨンが手織機に依拠した問屋制家内工業を主体とした、ヨーロッパの中でも卓越した絹織物産地になり、イタリアやレヴァントが同地に絹糸を供給し、スペインやイタリアがさらに養蚕を担っていた、というイメージが本書から浮かび上がってくる。問題は、古代と近代に挟まれた長い年月の間における絹のグローバル・ヒストリーが明らかでないことである。これが最初の論点である。例えば、本書第2章で登場す

(3) 阿部武司『日本綿業史——徳川期から日中開戦まで』（名古屋大学出版会、2022年）第9章の今治綿織物業の事例を参照。

(4) 川勝平太『日本文明と近代西洋——「鎖国」再考』（日本放送出版協会、1991年）36-94頁。

るオランダ東インド会社などは、中国産絹糸・絹織物をヨーロッパに輸出する上で重要な役割を果たしていたのではないだろうか。

次に、今述べたリヨンの最盛期に同地は王侯貴族をはじめ上層階級向けの工芸品的奢侈品を製造・販売していたが、それを大きく変えたのが微粒子病の流行であったことが本書の随所から読み取れる。アヘン戦争で勝利をおさめたイギリスが1842年の南京条約締結以降、中国産絹糸をヨーロッパに輸出するようにはなっていたものの、リヨンの織物業者にとっては中国産絹糸の品質は良くないため、あまり使用されなかったようであり、本書191頁の図によれば、リヨンが中国産生糸を使用するのは1860年代以降のことである。リヨンは、微粒子病が猖獗を極めるようになって、やむなく中国産絹糸を採用したのであろう。さらに第3章が説明している通り、中国の養蚕業ではその時期に微粒子病が拡大していたため、それを免れた日本の斯業の躍進がみられた。ともあれ、1860年代以降のリヨン絹織物業は、品質が良くないアジア産絹糸に頼らざるをえなくなったのであり、第9章が主張する通り、リヨン絹業の不安定性は増し、絹糸の改良を含む様々な対策が講じられた。そしてそれとともに、かつて工芸品的奢侈

品に特化していたリヨン絹織物業でも絹の大衆化に対応せざるを得なくなったのである。第8章が論じている通り、アメリカ絹織物業が採用した力織機による量産の開始も絹の大衆化をもたらしたのであるが、微粒子病は別のコンテキストでそれを推進したといえよう。

最後に、多くの諸国で絹業が女性労働によって支えられてきたことを見逃せない。絹業のうち織物業は、京都西陣の例からうかがわれるようにもともと宮廷産業とでもいうべき存在で、男子熟練工の支配下にあることが多かったのだが、織布以前に経糸と緯糸を織機に整える準備工程は、第5章と第7章の指摘通り、女性労働に支えられていた。さらに第11章が説明しているように、織布工程への力織機の導入は織布工程の主役も男性から女性に替えた。第6章が示唆する通り、近代の製糸業は女性労働に支えられていたとしても大過ないのである。

(Pierre Vernus, Manuela Martini and Tomoko Hashino (eds.), *A Global History of Silk: Trade and Production from the 16th to the Mid-20th Century*, Springer, 2024, xxii + 258 pages)

(あべ・たけし 大阪大学名誉教授)